

経営者の道徳的思考と判断に関する理論研究への プラグマティズムからの照射

Theoretical study on moral thinking and judgment of CEO : A Pragmatic
Perspective

岩田 浩 (IWATA Hiroshi)

周知のように、アメリカ経営学は、アメリカ経済の発展と企業経営の大規模化が進行する過程で経営実践の必要の中から、概ね19世紀末から20世紀初頭にかけて経営管理（management）の学として成立した。経営の現実的な実践的要求に応える学問として、アメリカ経営学は当初より理論と実践とを不可分のものとしてとらえ、実践志向的な管理論を発展させてきたと言われる。このようなアメリカ経営学に見られる特質は、ほぼ同時期に生成したアメリカの哲学思想であるプラグマティズムの認識論的特質と通ずるところがある。人間の認識作用を従来の「観想的」なものから「実践的」なものに理解し直すことを主唱するプラグマティズムの思想には、理論と実践の不可分性・連続性が深く刻み込まれている。ここに、「プラグマティズムの哲学がアメリカ経営学のバックボーンをなしている」と言われるゆえんがある。

とはいえ、“pragmatic”という語に含まれる「実用的」などか「現実主義的」などといった意味合いが影響してか、アメリカ経営学者によるプラグマティズムの受容過程を瞥見したとき、概して、それは当面の状況に合ったやり方で問題を迅速に処理し、実利の追求に勤しむ態度として通俗的に解釈されることが多かった。当然のことながら、このような実用主義的な解釈では、プラグマティズムの中心的主張である、人間の精神活動に含まれる知的ならびに道徳的価値の側面が見落とされてしまいかねない。

本稿では、このようなプラグマティズムに対する偏向した解釈を是正し、それが経営理論にもらしうる真意を明らかにすべく、デューイの思想を軸にして論を展開していくことにする。まずは、彼の社会思想書『新旧 個人主義』を取り上げ、20世紀の文明社会を牽引してきたアメリカ産業文明に対する彼の見解を概観する。そこには、公共的精神を欠如した産業化の蔓延に対する危惧が込められているだけでなく、新たな文明社会を切り拓いていく任を経営者に託す彼の思いも率直に綴られている。そして次に、経営倫理学を実践哲学との関連でとらえんとする論点をめぐり、そこで不可避免的に生じうる喫緊の課題——すなわち「正しい判断をいかにすべきか」といった判断のアポリア——についてデューイの道徳的・実践的判断論を頼りに試論的に論及することにする。以上の考察を通じて、これまでプラグマティズムに絶えず付きまどってきた実用一点張りのイメージを払拭し、それが経営理論にもたらしうる本来の実践的意味を浮き彫りにしていくことにしたい。